「"3高"から"3こう"へ　－新しい「障害者」定義の確立に向けて－」

国立民族学博物館
民族文化研究部准教授
広瀬 浩二郎

理想の男性像として"3高"(高学歴・高収入・高身長)がもてはやされたのは20年ほど前、私が大学生のころだった。人を見た目や数字で判断する"3高"とは、高度経済成長、あるいはバブルなどの語に象徴される戦後日本の「進歩」から生まれた浅薄な概念だといえよう。考えてみると、この"3高"からもっとも遠い所にいるのが障害者なのかもしれない。近年、障害者の呼称については種々の議論があるが、すくなくとも学歴(＝教育)、収入(＝勤労)、身長(＝外見)において不利益を被ってきた人々という意味で、障害者は確実に存在している。

本報告書がテーマとする障害者アートの定義は難しい。そもそもアートとは文字や言語を媒介としない自己表現の手法であり、障害者が作った物だから優れている、障害者の作品は特別扱いしようといった議論はナンセンスだろう。作者がだれであろうと、アートはアートとして評価されるべきである。しかし、芸術活動(制作、発表)の機会を社会的理由により不当に制限されてきた人は多数いて、その代表が障害者なのだともいえる。このような趣旨で国が障害者アートに注目し、障害者の芸術活動を推進する懇談会を組織したことは意義深い。本報告書が、従来の福祉施策とは一線を画する新たな障害者像を提示する方向性を打ち出したことを、ここでは強調したい。

さて、全盲である私は自身のユニークな立場を生かして、ユニバーサル・ミュージアム(だれもが楽しめる博物館)をめざす研究と実践に取り組んでいる。視覚障害者とは「視覚を使えない」弱者ではなく、「視覚を使わない」代わりに触覚など他の五感の潜在力を活用している個性的な存在だとするのが、私の基本スタンスである。そこから、視覚障害者／健常者に対して、触常者／見常者という区分を提唱し、さわる世界の創造的可能性、触文化の魅力を熟知する人として、触常者のライフスタイルを積極的に再解釈している。本報告書を通じて、私は触常者としての経験をも踏まえつつ、これまでの「非3高者」的な障害者理解を打破し、障害者の新定義を提案したい。障害者とは「"3こう"(考・交・耕)のできる人」というのが私の主張である。以下、"3こう"について説明しよう。

①考－情報の量、伝達スピードの面で視覚は他の感覚に勝っている。一目瞭然の語を挙げるまでもなく、視覚は便利である。テレビやインターネットは視覚優位の現代生活のシンボルだろう。一方、触覚では手のひらが触れた点でしか情報が入手できない。だが、その手のひらを上下、左右、前後に動かすことによって、点は線、面、そして立体へと広がっていく。能動的に手と頭を駆使して点を少しずつ拡大するプロセスは、人間の想像力と創造力を刺激する。

私は最近、暗闇の中でさまざまな物にさわり、その印象を言葉で伝えあう「手学問のすゝめ」ワークショップを各地で実施している。「これは何だろう」と考えながら、じっくりさわる。さらに、「ほら、これ」「あんな感じ……」といった視覚に頼る安易なコミュニケーションではなく、自分の言葉で説明する

難しさと楽しさを味わう。たしかに、見た瞬間にわかったような気にさせる視覚は、忙しい私たちの日常生活に適している。しかし、時には時間をかけて"考"してみることも大切なのではなかろうか。

知的障害者や精神障害者は私たちの常識からすると「どんなことを考えているのかわかりにくい」存在である。ところが、その常識とは人間の限られた知識、体験に依拠する脆弱なものであり、第六感や無意識のレベルまで加えてみれば、じつはしっかり考えているのは知的障害者たちなのかもしれない。絵画などのアート作品は、彼らの"考"の表出なのだ。

②交ー中世の琵琶法師は鍛え抜かれた声で『平家物語』を語った。彼らの語りは文字を用いず、師匠から弟子へ、口から耳へと伝承された。「耳なし芳一」の怪談を想起するまでもなく、琵琶法師の語りが庶民から貴族までの幅広い階級の人々に受容されたことは著明である。テレビやコンピューターのない時代、私たちのご先祖様は琵琶の単調な音と琵琶法師の声を聴くだけで、眼前に壮大な歴史絵巻、何百年も前の源平合戦の場面を展開させることができた。全身、すなわち皮膚感覚で琵琶法師の語りをとらえ、聴覚情報を自由に視覚情報へ変換していた。

こういった五感の交流、交換を演出していたのが「視覚を使わない」盲目の職人だった。視覚を含め五感が使える見常者に対して、琵琶法師は四感しか使えない(使わない)。ただし、ここで単純な「５＞４」の図式は成り立たない。多種多様な情報が溢れる現代社会において、目で得たものは視覚情報として、耳で得たものは聴覚情報として機械的に処理されている。情報の量にのみこだわって「進歩」してきた私たちの社会は、足し算と引き算の論理を重視し、"交"(掛け算や割り算)の必要性を忘却してしまった。物質的には貧しい前近代の日本は、だれもが"交"の妙味を知っていた「豊かな」社会だったに違いない。今日、「５＞４」の欺瞞を告発し、"交"のダイナミズムを教えてくれるのが障害者アートなのだ。

③耕ーパソコンや携帯電話は、障害者の生活に大きな恩恵をもたらした。私自身、パソコンで本報告書原稿を入力し、点字を知らない見常者と日々メールのやり取りをしている。このような日常にあっても、やはり点字は触常者の読み書きの手段として不可欠である。私が初めて点字に触れたのは13歳の時だった。ボツボツした点の羅列を指先で探り、「こんなの読めるわけない！」と思った。ところが、毎日ぽつぽつ点字の触読練習を繰り返すうちに、徐々に点の配列が認識できるようになった。点字は「なんとかして自由に文字を読み書きしたい」という触常者たちの渇望から生まれた究極の「さわる文字」である。先人たちの勃々たる思いを忘れずに、点字文化を発展させていきたいと願っている。

13歳の時の自分の経験を振り返ってみると、五感の潜在能力が拓く快感を思い出す。私は13年間、視覚に依存する見常者の生活に親しんでいた。幸か不幸か失明というアクシデントにより、大事な視覚が使えなくなった。一般に人間は成長とともに触覚を使用しなくなる。使わないものは深い眠りに入る。私の場合は触覚の眠りが比較的浅かったため、点字の触読をマスターすることができた。中高年の中途失明者は、努力してもなかなか触覚の目覚めに到達できないのが現実である。

失明とは辛く厄介な出来事であるのは間違いないが、五感(触覚)の潜在力を"耕"するチャンスを与えられたのだともとらえることができる。人間個々人には本人が気づいていないパワーが内在しており、そのような未知なる可能性を"耕"することが斬新な世界観、人生観の開拓へとつながる。

触常者の点字習得と同様に、知的障害者たちの奔放な芸術作品は、人間の能力の奥深さと"耕"の宇宙の広がりを私たちに示している。

以上、障害者とは「"３こう"のできる人」という私見を述べてきた。じっくり考え、自由に交わり、深く広く耕す。そんな"３こう"のできる人こそが21世紀をリードする。本懇談会の議論がきっかけとなって、"３こう"の重要性、さらにはその"３こう"ができる魅力ある人間としての障害者イメージが定着することを切望している。今……、"３高"から"３こう"へ！